

大会長挨拶

日本放射線影響学会第47回大会を東西の文化と歴史を育むここ長崎の地において、開催させて頂くことになりました。広島、長崎の原爆被災という『負の遺産』を乗り越え、放射線の人体影響学に与えた原爆被爆者の貢献は、リスク評価や放射線防護の面において特筆すべきものがあります。原爆被爆者の方々の存在は、この危うい核の時代であればこそ、平和の砦としてノーベル平和賞にもっとも相応しいと考えられます。科学の進歩とは人類の平和と環境保持に貢献してこそ使命を全うすると、この『負の遺産』は教えてくれています。放射線生命科学の進歩が、基礎研究分野の推進のみならず、高齢化する原爆被爆者への診断や治療に貢献し、貴重な試料やデータの収集管理とその活用にもつながり、将来への発展につながるものと期待されます。一方、放射線影響学の進歩は、世界の放射線被ばく者の救済から、不必要な放射線被ばくに対する防護や緊急被ばく医療体制の整備、そして宇宙時代への備えにまで幅広く貢献するものと確信されます。

時代の変遷の中で、長崎での大会は3回目となりますが、今回は『放射線といのち』というテーマで基礎から臨床まで幅広く演題を頂きました。プログラム委員長の渡邊正己先生をはじめ、長崎大学21世紀 COE プログラム『放射線医療科学国際コンソーシアム』（朝長万左男拠点リーダー）と広島大学21世紀 COE プログラム『放射線災害医療開発の先端的研究教育拠点』（神谷研二拠点リーダー）のご高配とご協力により、充実したプログラムが準備できました。ここに特別講演2題、シンポジウム23題、ワークショップ27題、一般演題260題（口演85、ポスター175）それに COE シンポジウム14題の総数326題の抄録集をお届けさせて頂きます。更に『放射線といのち』の主テーマでは諏訪中央病院管理者、鎌田實先生に市民公開講演を、また最新の PET 情報をランチョンセミナーとして準備させて頂きました。この機会に基礎から臨床にわたり幅広く先端科学と医療に触れて頂き、会員の皆様方にはぜひ活発なご討論をお願い申し上げます。

最後に、大会事務組織が、すべての準備から電子化対応による抄録の収集編纂など多方面にわたり大変な尽力をして頂きました。また多くの学会関係者にご協力頂きました。紙面を借りてお礼申し上げます。有難うございました。

ぜひ長崎で学び、長崎を学び、そして長崎を楽しんで頂ければ幸甚です。